

ポール・グライスにおける価値の实在と絶対性

Paul Grice on Reality and Absoluteness of Value

長 友 敬 一

要約：

善や正義などの倫理的な価値が实在するかどうか、また、それが相対的なのか絶対的なのか、といった問題に関して、ポール・グライスは独自の見解を述べている。彼は、物理的な諸要素に還元できるものとして存在を捉える還元主義的な考え方に對して、「われわれが必要とする説明の豊かさを手に入れるためのより優れた見通し」としての構成主義的なプログラムに基づいて「存在」の場所を確保する。

彼はまず、すべてを何らかの因果関係によって説明する機械論者への反論として「有機体の持続」を实在する「目的」と考える。そして「合理性の能力」によってその「目的」を達成する過程で、われわれ自身を、目的それ自体の望ましさやふさわしさを問うことができる「価値設置者(value-fixer)」としての「パーソン」として捉えることで、因果関係による説明からの離脱を行う。その上で、個々の人々の価値の相対性を認めつつも、絶対的な価値の存在を主張する。すなわち、生きていく（生存していく）ために目的を設定し、理由や正当化に基づいて推論していくわれわれの「合理性の能力」の共通性を根拠として、世界を説明するのに不可欠な仕方での絶対的な価値の存在を確保するのである。

Summary:

Do ethical values, such as justice and goodness, really exist or not? Are they absolute or relative? Paul Grice presents unique perspectives on issues such as these. Against reductionist thinking which regards “being”

as something that can be reduced to the elements of physical presence, he secure the location of the “being” based on a constructivist program as “the explanatory richness which we need” .

As an objection to mechanists who explain all matters by causality, Grice thinks that the organism’s continuance is the purpose or finality which exist in really. In order to avoid explaining by causality, he executes the manoeuvre of ‘Metaphysical Transubstantiation’. This manoeuvre is employed to erect, on the basis of the substance-type human being, a further substance-type person as a value-fixer which is capable of asking questions about the desirability of purposes in itself. Based on the above, while acknowledging the relativity of the value of individual people, he asserts the existence of an absolute value. That is to say, he secures the presence of an absolute value which is essential to explain the world based on the commonality of our ‘capacity of rationality’ with which we set purposes for living (survival) and infer on the basis of reason or justification.

1. はじめに

われわれは日常、「よさ」や「ただしさ」などのさまざまな倫理的価値について語っている。こうした価値をめぐるのは、それらが実在するものなのかという問題、あるいは、個人や社会などによって相対的なものなのか、それとも絶対的・普遍的な価値が存在するのかといった問題が提起され、古代ギリシアから現代にいたるまでさまざまな議論を呼んでいる。「善」や「正義」といった価値の実在に関しては、例えばプラトン(Platon BC.427-347)の『パイドン』でのいわゆる唯物論者への反駁¹や『ソフィスト』での「ギガントマキア」以来、さまざまな論戦が展開されてきた。価値に関する相対主義と絶対主義・普遍主義をめぐる問題についても、やはりプラトンの『テアイテトス』で紹介されたプロタゴラ

ス(Protagoras BC.500-430頃)の主張以来、現在に至るまで解決をみていない²。これらの問題に関して、本論では、グライスが展開した価値についての興味深い考察を検討する。

ポール・グライス(Herbert Paul Grice 1913-1988)は、言語学の分野で、特に語用論(pragmatics)の研究者として知られており、彼の業績の一つである『論理と会話』(*Studies in the Way of Words*, 1989)はつとに有名である。

語用論は日常言語学派のオースティン(John Langshaw Austin 1911-1960)の発話行為論に端を発し、サール(John Rogers Searle 1932-)に受け継がれている。グライスもまたオースティンのもとで研究を行い、字義通りの意味と含み(implicature)の関係性を研究し、意味を話者の意図(intention)の問題として分析を加え、語用論の基礎を作った³。

しかし、それほど知られてはいないが、グライスは理性と価値を扱った論文も多数残している。それらの幾つかは遺作集として、現時点では *The Conception of Value*, (1991) および *Aspects of Reason* (2001) として出版されている。それらの論文で彼は、合理性の能力の詳細な分析を行い、それと関連して、価値の形而上学、価値の实在の問題を取り扱っている⁴。

彼の論文は原文自体が読みづらいだけでなく、その内容を読み取ることが極めて困難である。従って、以下の論述には筆者の解釈が大きく関わってくることは避けられないが、可能な限りグライスの議論の主旨を追い、価値の实在の問題、ならびに価値の相対性と絶対性をめぐる問題についての一つの見解を提示したい。

2. グライスの「存在」の概念

最初にグライスの「存在」の概念を明確にしておこう。彼は存在の分析にあたって「形而上学的プログラム」というものを提唱している。それは次のように導入される。「私がフォローしようとしている形而上学のプログラムは、構成主義者のプログラムであって、還元主義者のプログラムではない」⁵。すなわち、存在を原子や分子と言った自然的に存在すると思われているものにのみ還元するとい

う方向ではなく、ロジカルな考察によって存在を構成していこうとする試みを提示しているのである。それはまた「存在の世界のうわべの豊かさを何らかの好みの範囲の諸要素に還元できるものとして表現しようと努めるよりも、われわれが必要とする説明の豊かさを手に入れるためのより優れた見通し」とも言われる(このような仕方で作成された存在者の一例として、彼は「数」を挙げている)⁶。このように「存在」を世界の「説明」という文脈で捉える試み、すなわち、「世界を理解するための説明を組み立てる」ために必要なものに「存在」の地位を与えるという方向は(グライス自身が明示的に触れているかは疑わしいが)プラトンによって既に述べられた考えではないかと思われる⁷。

ところで、グライスが提唱するそのプロセスは、恣意的な仕方で作成者を立てることではない。彼もまた、自然的な存在を基礎にしてプロセスを進めていく。その考察の見取り図を提供するのが、アリストテレス(Aristoteles BC.384-322)の哲学の全体である。つまり、『靈魂論(*De Anima*)』で次第に複雑になる生物のつながりを特定し、結論部分として『ニコマコス倫理学(*Ethica Nicomachea*)』において、生物のつながりの最後に出現する最も複雑なタイプの生物(具体的には人間を指している)に随伴する理論の一部を本質的に構成するものとして、価値の観念を提示することで、彼のプロセスは達成される⁸。

そのプロセスの過程で、彼は次のようなことを述べている⁹。生物は、子孫全部の身体を含まうとして極めて大量の個体を自分自身の中に持つことになるのを避けるために、「成長と成熟」というやり方を導入した。成長と成熟を通して到達される状態というのは、生き物がそれを求め、それへ向かって努力する(必ずしも意識的な仕方ではないが)状態でなければならない。また、生物は、働きや仕事を持つさまざまな器官とか部分(目を見るもの、足は歩くものなどといった)の組み合わせの働きによって、その生命機能を遂行する。有機体の持続に対して、それぞれの部分はそれぞれに特有の仕方で作成に貢献するのだから、そういった部分の仕事とか機能は、有機体の持続的存在との関係によって区分される。つまり「有機体の持続」が、それぞれの部分の本性を説明するために、有機体がそれ

を求めて努力する何か、つまり「目的」として必要になる。以上のことから、「最終目的」が生じる。そのような目的とか最終目的は、意識的にであれ無意識的にであれ、その目的を抱くどんな生き物または存在からも、切り離されている（もしセイウチまたはセイウチの口髭に目的があるとしたら、それは、セイウチの目的またはその口髭の目的だとしても、セイウチが抱く目的でもなければ、その口髭が抱く目的でも、あるいは神が抱く目的ですらない）。そして、説明を求めるためのただ一つの形式があるのではなく、目的因の働きは、作用因または質料因の働きを要求する。ある種類の有機体に、ある器官がなぜ存在するのかを問う問いに対する、最終目的による説明が成功するかどうかは、その器官がどのようにして存在するようになったかに関する、適切な作用因による説明を手に入れることができるかどうかによるかもしれない。

「最終目的」とは、どんな（目的の）所有者からも切り離された目的、つまり、その内容が何であれ、それを自分の目的として所有する、意識的な存在者がまったく存在しなくても、存在することができるような目的のことを意味している。そして、生物の観念は、目的とか最終目的とか目的因などの観念を前提しなければ理解できないのである。

3. 機械論への反論

この考え方に対する機械論者からの予想される反論は、グライスの言う最終目的、すなわち「有機体の持続」は、「目的」ではなくて有機体がある特徴を持ったことの一つの「結果」に過ぎない、というものである。しかしグライスは以下の再反論を試みる。

ある意味で私は、なぜ17人の人が市場にいるのかを説明することができる。つまり、それぞれの個人について、なぜその人が市場にいるのかを説明することができるならば。またさらに、市場にいたかもしれない他の人たちが、なぜ実際には他の場所にいるのかも説明できる。しかし、これらの説明

をすべて行ってとしても、なぜ市場にいるのが17人なのかは説明されない（もしくは、少なくとも直接的には説明されない）と主張することにも、もっともな意義がある。「説明のギャップ」を埋めるために（つまり、17人の人が市場にいることについて、単に間接的に説明するのではなく直接的に説明する、すなわち、市場に17人いることをそれ自体として説明するために）、私は新しい理論、たぶん社会心理学の非常にいかがわしい分野が何かを導入しなければならないだろう。そして（恐らくはカタストロフィー理論のような）いくつかの科学理論は、既存の理論によって何らかの意味で既に説明されている事柄について、（「説明する」のより強い意味で）説明するために、おおよそそのような仕方、万能ではないにしても完全に申し分ない先行する理論を（いわば）後ろ盾にして、生まれてきたのではないかと思われる¹⁰。

グライスは、何らかの因果関係で説明を終える機械論者に対して、「最終目的に関する話がもはや因果連関に関する話に写像できない、オーバーラップ（普遍的な言明を単純に単独の言明の要約と見なすこと、あるいは、普遍的な言明を個別的な言明の連言に等価なものとする）を超えた領域があるかどうかを知ることが必要になる」と述べ、「絶対的価値がその居住者として正当な資格を持つ、形而上学的領域」の探求に乗り出すのである。

4. 形而上学的実体変容

グライスは「何かが最終目的を持つこと」を、その「何か」にとって、その種や類に属する実体の「同一性の条件」と結びつけた「本質的な特性」と考える。「本質的な特性」とは、そのものが存在すること（自己自身と同一であること）をやめないで失うことができないような特性である。この見方は「存在することとはある一定の種や類の構成員であることである」というアリストテレスの考え方に対応している。また、「本質的な特性」とは、虎らしくするとか人間らしくするといった能動的な能力でもある¹¹。

その上で彼は「形而上学的実体変容(Metaphysical Transubstantiation)」という考え方を提起する¹²。ある実体「S1」の本質的な特性を「P」としたとき、他の実体として、その「P」を所有するにしても、本質として所有するのではなく、「S1」が付带的に所有している他の特性の集合「R」の方こそを本質として所有するもの、すなわち実体「S2」が導入されるのである。具体的には、「人間」という実体タイプ「S1」を基礎にして「パーソン(person)」という実体タイプ「S2」を生成させるということである。

では、パーソン(S2)が本質的に所有する特性である「R」とは何だろうか。グライスは、遺伝子制作者(genitor)（それは文脈によってはわれわれと同一視される）が一連の様々な生き物を作り上げていったと想定する。それらの生き物の生存の機会をよりよいものにするために、遺伝子制作者は「合理性の能力」をそれらの生き物に付け加えた。「合理性の能力」とは、「しかるべき理由に基づいて同意できる能力」とも言われる。不安定な世界や、安定していたとしても複雑な世界では、広範囲な刺激に対する異なった対応を本能の中に前もって埋め込む場合、かなり膨大な仕組みを必要とする。そこで、そのような仕組みに代わって、合理性の能力を備えることが経済的で有効になるのである。

そこで、ホモ・サピエンスという実体タイプには、「合理性の能力」は非本質的な属性として付加される。次に、「合理性の能力」が本質的な特性として装備される実体タイプ、すなわち「パーソン」が登場する（ホモ・サピエンスという実体タイプが「パーソン」という実体タイプに変容する）というわけである¹³。

5. 絶対的価値と自由

グライスは以上のような想定のもとに、絶対的価値の位置づけを図る。その過程を見てみよう¹⁴。

ホモ・サピエンスに最初に備わった「合理性の能力」は、一定の生物学的な目的を達成するのに充分な、ある限定された範囲の問いに答えることができるだけであった。しかし次の段階で、「合理性の能力」は限定された範囲の問いよりも、さ

らに多くの問いをたてることが出来るようになった。すなわち、それまでは、既に決まっていた目的をどのように達成するか、という点に「合理性の能力」が働いていたのであるが、ある時点で「合理性の能力」はそれを超えて、「目的それ自体の望ましさやふさわしさ」を問うことができるようになっていったのである。グライスの言葉を借りれば「仮言的命令(hypothetical imperatives)を超えて、定言的命令(categorical imperatives)を手に入れることができるかどうかについて問いを立てる」¹⁵ことができるようになったのである(その問いに答えられるかどうかはともかく……おそらく答えることはできないだろうとグライスは確信しているようである)。このようにして、遺伝子制作者によって備えられた非本質的な属性である「合理性」を、ホモ・サピエンスは、「パーソン」としての自分に本質的な特性として備わるようにすることがふさわしいということを発見したのである。

この時点で、先に述べた機械論者の「オーバーラップ」は終わりを告げ、目的や価値に関する話は、もはや因果連関に関する話に翻訳できないことになる。なぜなら、機械論的な自然の因果性への還元は、価値の設定に関しても私たちの自由意志の外の自然界にある「外的な原因」を持ち込むことになるが、「パーソン」は、目的それ自体の望ましさやふさわしさを問うことができるようになっている時点で、自分自身に対しての「価値設置者(value-fixer)」¹⁶になっているからである。グライスは、例えばデイヴィッドソン(Donald Davidson 1917-2003)のような、行為を欲求と信念に還元する仕方での分析に対して、強い反論を唱え、カント的な意味での「強い自由」を、「パーソン」の最も基本的な場所に求めているのである¹⁷。

6. 価値の相対性と絶対性

さて、自分が自分自身に対しての「価値設置者(value-fixer)」となる場合、そこで設定される価値が、個人にとっての価値であり、相対的な意味を持つものである可能性がある。グライスはどのようにして、この価値の相対的な状況から、絶対的・普遍的な価値の問題へと到ったのだろうか。

グライスは以下の例を挙げて、実践的な行為推論を問題としている。ある人S

は、来週、ミルウォーキーの母のもとに来よう呼ばれている。また、同じく来週、レッドウッドシティで、自分が主任会計士をしている会社の収支報告書を準備しないとイケない。さらに、妻が自動車事故で両足を骨折し内臓も損傷してボイシの病院に入院している。この場合、Sは来週どのように過ごすのがよいかを、自分にとっての重要度に従って、さまざまな条件や可能性を考慮して推論し、結論を出さないとイケない。Sはどの帰結を承認することになるだろうか¹⁸。

グライスはここで、実践的な承認可能性(practical acceptabilities)が特定の個人に相対的である可能性を提示する¹⁹。彼は他の論文でも、相対的な様相と絶対的な様相について論じているが²⁰、そこでも、真偽における領域とは異なって、実践的な領域においては特定の様相が個々の人物に相対化される事例があることを問題としている。

しかし彼の目的は、真偽における領域と実践的な領域とを統合して論じることであり、ここで目指されているのは実践的な領域において相対的な様相があることを認めつつも、絶対的な様相が確定される可能性である。

グライスは、必然性に関して、それがあある体系や理論に対して本質的に相対的であることを述べる。というのも、論証が達成されるのは体系や理論の内部においてであり、論証の可能性はその体系や理論の構成に依存するからである。従来の哲学者をはじめ多くの人は、論理的な理論とは前もって与えられる必然性の全体を体系化するものであると考え、そして道徳的な理論も、前もって与えられる義務や責務（倫理的な必然性）を体系化する、と考えている。

ところがグライスは、ここで「優先順位の逆転」を提起する。すなわち、「体系が最初に来る」のであり、「体系がなければ必然性もない(no system, no necessity)」と考える。そして、さまざまな体系群の中に、連続的な関係が見出されると予想する。例えば、理論A（論理学）は理論B（形而上学）によって前提され、理論B（形而上学）は理論C（物理学）によって前提されるというように。魚に特有の法則がああるとしても、魚類学的な（魚類学にのみ固有の）必然性が存在するわけではないのである。

さて、ある特定の個人が、自分がどう振る舞うかに関する利己的なマニュアルを構成する体系があるとしよう。それは、彼自身の目的が何であるのかを本人が定めたものである。しかし自分がどう振る舞うかに関する利己的な一群の原則は、一般的な仕方而言及しつつ限られた数の親原則から導出されると考えられる。個人についての言及は、その個人が所属している人々のクラスへの言及と関わっている。個人レベルの必然性は、公共レベルの必然性とは異なるが、公共レベルの必然性によって根拠づけられている可能性が高い。グライスはフット(Philippa Ruth Foot 1920-2010)を批判した論文でも、行為に関わる社会的なルーチンや慣習について触れている²¹。彼は個人レベルの相対的な必然性に関する「普遍化可能性の原則(Universalizability Principles)」の承認のための次の議論を提出している。

もし或る人Xにとって、Pが真実であることが必然であるなら、Xが充足する或る条件Sがあるのがよいということが、また（必然的に）Sを充足する者yが誰であろうと、yにとってpが真実である（pであることがよい）は必然であることが、実践の意味において必然である²²。

グライスが行っているのは、真偽の関わる理論的な領域における必然性と実践的な領域における必然性との架橋である（この戦略は、真偽に関わる推論にも実践的な推論にも共に全く同じ理性の働きが発動するというカントの主張に依拠している）²³。そのどちらの領域にも相対性と必然性・絶対性が登場するのであるが、とくに実践的な領域における必然性に寄与するのは、論理的な要件ではなく、理性的な要求(rational desideratum)であると考えている。これはどのような意味で語られているのか。

7. 価値の絶対性と合理性

グライスが価値的なものや実践的な領域での絶対性を確保するための基本戦略の要は、先に実体タイプ「パーソン」の本質的な特性として述べた「合理性の能

力」にある。彼は「合理性の能力」を、「不変的な合理性(flat rationality)」と「可変的な合理性(variable rationality)」に区別する²⁴。

「不変的な合理性」とは、「人が合理的な存在であると言われる場合に適用される概念」であり、この概念では、どんな人でも他の人よりも多くあるいは少なくとも理性的であるわけではなく、みな等しく理性的である。グライスの念頭にあるのは、思考における推論規則の適用能力である。これは車の運転免許を所有して一通り運転できることに対応する。あるいはチェスで喩えれば、チェスの規則を知っていてコマの動かし方などに適用できることに対応する。

「可変的な合理性」は、この「不変的な合理性」に接続された概念で、程度の差を許容する。より多く合理的であることの方がよりよい、といった「価値の違い」が存在する。推論に関しても、上手に行える者が存在している。これは、よいドライバーに、あるいは上手なチェスプレイヤーに対応する。こうした能力は実践などを通して学ばれる²⁵。この「可変的な合理性」は知的な卓越性とも呼ばれる²⁶。

これらの合理性の能力は、理由や正当化を伴った推論能力によって保たれており、その推論は何らかの目的達成に向けられている。最終的な目的が（アリストテレス的に言えば）幸福である場合、「幸福である」とは、「ある目的の組み合わせが、ある特定の目標や観点に照らして価値あるものとなるように、いくつかの目的を組み合わせることである」と規定されるかもしれない²⁷。グライスは、幸福について、以下の記述を行っている²⁸。

ここで私は、アリストテレスが採ったのとさほど異なったものではない途を探ろうと思う。一般的な意味での幸福の概念は、人間（理性的な動物）の本質的な特徴を参照することで定義される可能性を検討したい。一般的な意味での幸福の概念に関わる目的は、おそらく、個々の人々の能力を、それぞれの人々に特有なさまざまな仕方でも豊かに実現することである。その個々人の能力というのは、異なった環境での対応可能な最も広範囲な人間が生きて

いくための条件の中で、生物を最高度に生存できるようにするために、生物制作者が生物に授けなければならない能力のことである²⁹。

このようにして導き出された幸福の一般的特徴は、『靈魂論』での生物のつながりから『ニコマコス倫理学』に収束する価値の観念をめぐるプロジェクトの再記述であり、内容の「濃い」意味での一般性を提供している。

さらにグライスはこうした幸福を、相対性を超えて一般的に特徴付けるものとして、「安定性」を挙げる。幸福とは人生の方向付けのための目的の体系と捉えられるが、その目的のために体系が継続的に用いられねばならないからである。その「安定性」は「柔軟性」によって補われる。体系が変更を迫られた場合、簡単な調整で変更が達成されねばならないからである³⁰。これはある意味で「薄い」意味での一般的特徴かもしれないが、構造的な共通性を約束するものであろう。先に述べたように、必然性は体系や理論に対して本質的に相対的であるとしても、さまざまな体系群の中に連続的な関係が見出され、個人レベルの利己的な必然性もまた、上で述べたように一般的特徴付けがなされ、公共レベルの必然性によって根拠づけられる可能性がある。

さて、これまでみてきたように、グライスは、構成主義的なプログラムに基づいて「存在」の場所を確保した上で、個々の人々の価値の相対性を認めつつも、絶対的な価値の存在を主張した。それは、生きていく（生存していく）ために目的を、反省を繰り返しつつも自律的に設定し、理由や正当化に基づいて推論していくわれわれの「合理性の能力」の共通性に根拠をもつものである³¹。彼のプロジェクトは、プラトン、アリストテレスそしてカントの、倫理学と形而上学を統合する業績に、新たな光を当てるものであり、われわれの「価値」と「存在」の概念を新たな高みにもたらすものとして、一層の研究と評価に値するものである。

註

- 1 例えば、長友(2005)pp.8-9などを参照。
- 2 簡単な見取り図については、長友(2008a)pp.180-189を参照。
- 3 Grice(1989)参照。
- 4 グライスの哲学的な遺作はいまだに未整理のまま多数残されており、出版の予定は立っていないようである。なお、本文に挙げた二つの著作を含む幾つかの論文は、現時点で岡部勉が邦訳の出版を予定しており、私もそのプロジェクトに関わっている。グライスの著作について論じられた出版物も極めて少数ではあるが、例えばグライスへの献呈論文集である *Philosophical Grounds of Rationality* (1986)では Donald Davidson, John Searle, P.F.Strawson, Jaakko Hintikka, John Perryなど、さまざまな分野の著名な研究者がコメントを寄せており、グライスの研究の幅広さと奥深さ、哲学の分野における重要性を物語っている。
- 5 ‘The Carus Lectures on the Conception of Value, 3. Metaphysics and Value’, in Grice (1991), pp.69-91, esp.p.70
- 6 Grice (1986b),p.89参照。
- 7 このような考え方については、Burnyeat(1980)を参照。なお、長友(2005)pp.8-9、長友(2008b)pp.41-47などでもその点について論じている。
- 8 グライスの哲学的な論文の多くでは、アリストテレスの哲学がかなり重視されている。彼の「形而上学的プログラム」は、アリストテレスの生物学を形而上学を仲立ちに倫理学と結びつける壮大なものである。
- 9 ‘The Carus Lectures on the Conception of Value, 3. Metaphysics and Value’, in Grice (1991), pp.69-91, esp.pp.73-79
- 10 *ibid.* pp.76-77
- 11 *ibid.* p.79
- 12 以下の記述は、*ibid.* p.81以下を参照。なお、Grandy and Warner (1986) pp.31-38でも、グライスの倫理思想における遺伝子制作者(genitor)によるパーソンあるいはpirotsの位置づけが特に重要であることが論じられている。
- 13 グライスの「合理性の能力」については、岡部 (2007) pp.30-41を、また、「実体変容」に関

しては、同書pp.134-135を参照。

- 14 以下、'The Carus Lectures on the Conception of Value, 3. Metaphysics and Value', in Grice (1991), pp.69-91, esp.p.85 ff.参照。
- 15 *ibid.* p.86. もちろん、カント(Immanuel Kant 1724-1804)の用語が使われている。グライスの論文には、アリストテレスと並んで、カントへの言及も多い。なお、仮言的命令と定言的命令に関する議論は、'The Carus Lectures on the Conception of Value, 2. Relative and Absolute Value', in Grice (1991), pp.47-67でも詳細に行われている。
- 16 'The Carus Lectures on the Conception of Value, 3. Metaphysics and Value', in Grice (1991), pp.69-91, esp.p.90
- 17 デイヴィッドソンの行為論については、Davidson (1980)参照。グライスはGrice (1986a)でデイヴィッドソン批判を行い、「強い自由」の概念を提示している。この点については、岡部(2011)を参照。
- 18 ちなみに、ミルウォーキーはアメリカの五大湖沿岸に、レッドウッドシティーはカリフォルニアに、ボイシはアイダホ州にあり、相互にかなりの遠距離である。
- 19 'Practical and Alethic Reasons: Part I', in Grice(2001), pp.67-89, esp.pp.83-4
- 20 'Reason and Reasons', in Grice(2001), pp.26-66, esp.pp.56-66
- 21 フットはトロロッコ問題(Trolley problem)や徳倫理学の現代への復活で有名なイギリスの倫理学者である。グライスは'The Carus Lectures on the Conception of Value, 2. Relative and Absolute Value', in Grice (1991), pp.47-67において、フットが価値の客観性あるいは絶対的価値を否定していることに対して、理由と目的の概念を基盤として反論を展開している。
- 22 'Reason and Reasons', in Grice (2001), pp.26-66, esp.p.65
- 23 *ibid.* p.44
- 24 *ibid.* pp.28-36
- 25 'Reason and Reasoning', in Grice (2001), pp.4-25, esp.pp.20-25
- 26 'Reason and Reasons', in Grice (2001), p.31。グライスはこの知的卓越性の分析を、アリストテレスに依拠して論じるが、むしろカント的な基礎づけが有効であると考えている。
- 27 'Practical and Alethic Reasons: Part II', in Grice (2001), pp.90-111, esp.p.111

- 28 グライスの道徳哲学の主要なポイントが「幸福」にあることは、Warner (1986)を参照。
- 29 'Some Reflections about Ends and Happiness', in Grice (2001), pp.112-134, esp.p.134
- 30 ibid. p.130-133. この他にも、実行可能性、自律、目的間の適合性などのいくつかの特徴が挙げられている。
- 31 倫理的価値と「生きていくこと」の問題については、長友 (2008b) pp.41-47を参照。なお、感情や欲求の問題も合理性に調和するものとしてグライスは述べているようである。この点については長友 (2010) pp.19-26で触れている。

文献表

- Burnyeat, Myles Frederick (1980) 'Socrates and the Jury', *The Aristoterian Society Supplementary Volume* 54, pp.173-206 (邦訳：天野正幸訳「ソクラテスと陪審員たち」、井上忠・山本巍編訳『ギリシア哲学の最前線 I』、東京：東京大学出版会、1986、pp.146-173)
- Davidson, Donald (1980) *Essays on Actions and Events*, Oxford : Oxford University Press (邦訳：服部裕幸、柴田正良訳『行為と出来事』、東京：勁草書房、1990)
- Grandy, Richard E. and Warner, Richard (1986) 'Paul Grice: A View of his Works', in *Philosophical Grounds of Rationality*, (ed.) Grandy, Richard E., and Warner, Richard, Oxford : Clarendon Press, pp.1-44
- Grice, Herbert Paul (1986a) 'Actions and Events', *Pacific Philosophical Quarterly* 67 pp.1-35
- (1986b) 'Reply to Richards', in *Philosophical Grounds of Rationality*, (ed.) Grandy, Richard E., and Warner, Richard, Oxford : Clarendon Press, pp.45-106
- (1989) *Studies in the Way of Words*, Cambridge, Massachusetts : Harvard University Press (邦訳：清塚邦彦訳『論理と会話』、東京：勁草書房、1998)
- (1991) *The Conception of Value*, (ed.) Baker, Judith, Oxford : Clarendon Press
- (2001) *Aspects of Reason*, (ed.) Warner, Richard, Oxford : Clarendon Press Warner, Richard (1986) 'Grice on Happiness', in *Philosophical Grounds of Rationality*, (ed.) Grandy, Richard E., and Warner, Richard, Oxford:Clarendon Press, pp.475-493
- 岡部勉 (2007) 『合理的とはどういうことか 愚かさや弱さの哲学』、東京：講談社選書メチエ

—— (2011) 「行為と出来事：P.グライスの戦略」、熊本大学『文学部論叢』第102号、pp.79-97

長友敬一 (2005) 「プラトン」、村松茂美・小泉尚樹・長友敬一・嵯峨一郎編『はじめて学ぶ西洋思想』 pp.6-12、京都：ミネルヴァ書房、2005

—— (2008a) 「「正しさ」は社会によって違うのだろうか」、熊本学園大学経済学部編『サテライト講義21講』 pp.180-189、京都：ミネルヴァ書房、2008

—— (2008b) 「なぜ知識に倫理が必要なのか」、渡部明・長友敬一・大屋雄裕・山口意友・森口一郎著『情報とメディアの倫理』第2章、pp.36-48、京都：ナカニシヤ出版、2008

—— (2010) 『現代の倫理的問題』、京都：ナカニシヤ出版

謝辞：本研究はJSPS科研費24520020の助成を受けたものである。